

利益配分の政治から、国民と信頼を分かち合い、不都合な現実を直視し、真摯な姿勢で説得し、それでも信頼され、期待され続ける。一体金銭そんなことは可能なのか、あり得るのか。頭がおかしくなったのではないかと。選挙で落選したら元も子もないではないか？日本の将来を考えれば、考えれば、その厳しさに恐れおののき、身体の震える思いでした。半年間、身近な人の意見を聞き、苦悶し続けました。しかし、あるとき、フッと振っ切れ、身体のカが抜け、思いが定まったのです。自分が本当のことを言えないと感じるのは、本当のところ国民を信頼し切れていないからだ。そして国民を信頼していない政治家を国民が信頼することはない。と、あらためて覚悟は定まりました。不都合なことを含め本当のことを言う、国民を信じ、国家の将来を信じているからこそだと。決死の覚悟で作った昨春秋のチラシには、包み隠さず、私の信する所を誌面いっぱい、記させて頂戴しました。これに手応えを返して下さったのは、根本さんでした。(\)

本物は時代によっても変わる

本物の政治家を見分け、仕分ける。しかもこの「本物」は、時代によっても変わる。

3

読売新聞(2006年1月1日付)より 政治家の役割



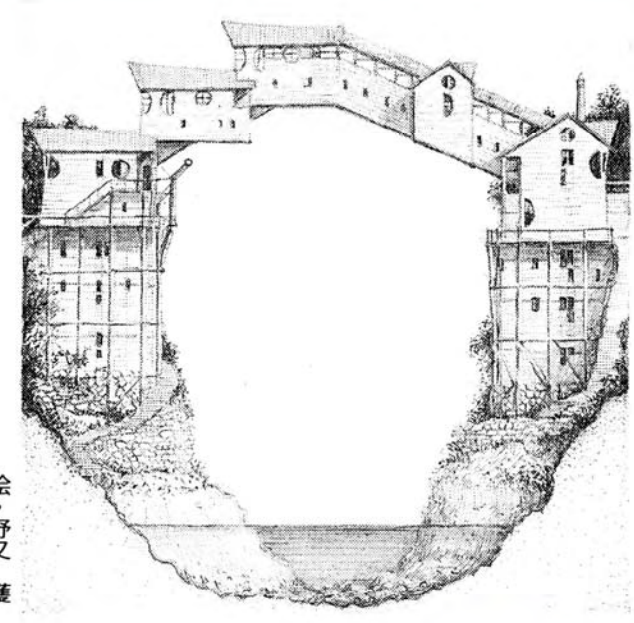
小川 淳也さん 民主・比例四国。34歳。東大卒。総務省(旧自治省)を経て、2003年衆院選に挑戦するも落選。子供のころの夢は「プロ野球選手。政治家にはなりたいかと思っていた」。

小川 経済が成長し、人口が増えていた時代は、パイを分配するのが政治家の仕事だった。今後、人口が減る低成長の時代は、痛みや負担をお願いする側に回る。両者を比べると、政治家に求められる信頼感の違いは大きい。旧来モデルの政治家の役割と今後の政治家の役割とのギャップが原因だと思います。

10月2日当日、不覚にも悪化してしまった体調を押し殺し、震える気持ちで高松市内の会場に向かいました。そこには予想をはるかに上回る会場参加者の皆様…本当に嬉しかった。ありがたかった。感謝の気持ちでいっぱいでした。必ずや日本の将来は明るい。脈がある。そう確信した瞬間でした。



Opinion



絵・野又 穂

すら考えたという挿話が面白い。刊行から5カ月、松井氏は語る。「国民にわかりやすく届けるために言葉に練りに練り、ヤスリをかける。その大変な手間を日本政治はおろそかにしてきた。1行分でも1分分でもいいから聞いてもら

はもう、その場しのぎの繰り返しをやめなければならぬ。「政治家が本当のことを言う時代」を招来しなければならぬ。しかし、有権者にとってはかなり苦しい主張である。実際、風当たりはすでに強い。落選の恐怖が襲う。人気刑事ドラマのセリフが頭をよぎる。「正しいことをやりたかったら、偉くなれ」。言葉で生きるか、言葉で滅ぶか、瀬戸際の葛藤にさいなまれる。10月2日、地元高松市でひらく講演会が勝負どころになる。政治の言葉は一筋縄ではない。明快さや力強さだけでなく、進むわけではない。あいまいさが緩衝材になり、欺瞞や偽善が功を奏することもあろう。権力の言葉の魔力を甘くみれば、小さなうそより大きなうそにだまされるということにもなる。しかし、ときには身にしみじみと実のある言葉を聞いてみたい。おそらくそれは、一人一人の政治家がそれぞれに煩悶し、懊悩するなかから絞り出してくるしかない。苦しむ才能というものがあるとすれば、それを豊かに秘め持つ政治家を私たちは見いだしていくほかないのかもしれない。